

昭和二十三年九月一日第三種郵便物認可
平成二十一年五月一日発行
通巻一〇〇五号(毎月一回一日発行)

京鹿子



5月号

抱卵中
丸山佳子

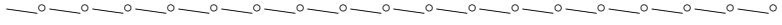
館のお庭に大雪だるまあなかしこ

本心を明かさず消えり雪だるま

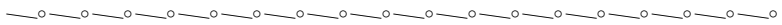
饗庭野の雪に活発スプリンクラー

晴れ男晴れ女にも黄砂降る





蛇 穴 を さ て こ れ か ら も 相 和 し て
治 水 像 に 湖 三 月 の 波 き ら き ら
う し ろ 指 児 ら に も 指 さ れ 鴨 残 る
芽 柳 や い か な 人 に も 不 和 し ら ぬ
無 人 売 り の 畑 に 一 蝶 ア ル バ イ ト
あ の 山 の 答 え は 一 つ 抱 卵 中

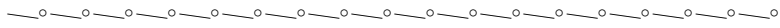


豊田都峰

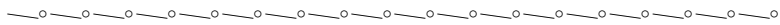
清響集 その八十五

総立ちの木の芽の囲む弁財天
若草を敷けば遠嶺はかがやきに
ほのめきは白酒くみしよりのこと
水仙忌三步下がりに俳系受く
公家邸は泉水のみや名残雪
料峭やすぐ曲る径また選ぶ





茎	演	企	丘	雑	春	邸	春
立	じ	み	く	木	雪	址	雪
や	き	の	だ	山	や	と	の
昨	る	美	る	空	護	て	建
日	こ	談	南	ま	王	楽	礼
の	と	も	お	で	の	の	門
径	も	ま	も	芽	社	神	な
は	手	た	て	吹	猪	守	り
も	柄	よ	は	く	づ	る	正
う	よ	し	春	雨	く	春	面
採	大	大	な	ひ	め	の	と
ら	石	石	か	と		雪	す
ず	忌	忌	ば	日			



秀華採集

水仙の系図いちばん上は海

直江裕子

生命体は海から生まれたという。水仙という生命体は海岸に自生する。そんなドラマをたいへん手際よくまとめている。

臘梅にいろを移して昼の月

正田巴麻

山風の父と打ちあふ大氷柱

伊藤希眸

前句、色を失った月を「臘梅に」移したためとは、いい感覚で処理されている。後句は「父」の権威を持ち出したことを手柄としたい。俳句は屈折して表現すると深まるもの。

鈴鹿 仁

ものの芽

ものの芽のもの影もつ佛みち
初蝶の一意めくもの見せにくる
蜂とんで地球異変へ針の先
一行の訓へ身ぬちに花洛の忌
春ごころ風にもありし農仕度

高尾敏夫氏追悼

別れ霜余白の儘の句帳措きて

福島美香子姉追悼

花便り聞くこともなく終の旅

近 詠

宇都宮滴水

ぼたんの芽

羽樽きて五月の宮の音ふやす
ぼたんの芽乳房ちちふさつかむ小さきゆび
抽出しの中の一つに涼もらふ
ゆるやかな曲り角あり花洛の忌
つばさ止め飛簷の一角夏となる
をさなさの残る妓もゐる花をどり
少年期柔いところに汗の玉

神麓集



高木 智
雑煮祝ふ窮地を抜けし椀の艶
寒梅や化学療法完遂す
癌封じ得たりと啜る寒卵
見舞客まづ雛の間に通しけり
雛の間のぬくし終日灯して

松田 都青

水が湯になつただけなり成人式
極楽に行ける姿勢で梅が咲く
片意地を無くせし餅より膨れ初む
どうしても視線の合はぬ親と屠蘇
華麗なる翳を持ちたく初鏡

鬼は外 北川 孝子

言問はむみひらく梅のしづごころ
合槌に一步おくれしくさめかな
満ちたりし書棚にどつぷり鬼は外
節の夜の音律しかと父の唄
追儼閨女ふたりの声高に

船越 美喜
花すみれ
身の丈の倅せに足る花すみれ
億劫なことより始む日短か
節分の豆を数ふるあといくつ
失ひしもの多さよ芦枯るる
止みしかと見上ぐ襟あししづり雪

寒 明 荻野 千枝

寒明やいつしか老いし飾り花
しんしんとうす雪月夜の夜明前
梅固し憂ひは常に極秘なり
八十路越ゆ九輪の錆に寒夕陽
寒すばる過ぎしむかしの夢のあと

紅 梅 柴田 朱美

紅梅や身のうちにある水たまり
紅梅の艶もて遊ぶ風の猥
紅梅に宿る母の血風はやし
紅梅や水をなだめて紙を漉く
紅梅やおののきて散る藁廂

神麓集



初鏡 伊藤 希眸
おはやうと初鏡から声溢れ
初鏡傘寿の鐵をのばしぬし
帯結ぶ腕の白き初鏡
初鏡すでに三つ児の髪飾り
一人旅決意してゐる初鏡

川崎光一郎

鉄瓶の湯気ふつふつと寒明ける
「鬼は外」桃源郷はまだ遠い
淡雪やきらめく羅漢の鼻の先
初恋を憶ひ出させる春の雪
七福神お休み二月の逃げたがる

平城宮址と住民

奥村 鷹尾

庭手入寒中となり作務中絶す
奈良人は「どか雪」知らず車減り
東院宮址遺蹟多しと雪の沙汰
雪の舗装道路知らぬ奈良人雪を避く
自家用の雪の運転避けさしむ

岩崎 憲二
雛の客重ね袂の横座っなり
若草に仮眠をさます遠銃り声
水仙忌思ひ出百が甦がへる
白酒に重ね袂の横座り
白酒をチヨツピリ舐めし目が笑ふ

雪に酔ふ

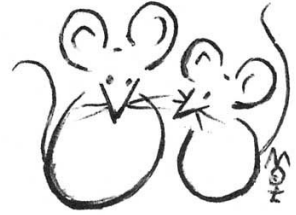
松本 鷹根

畝にして寒の日射しを地に馴らす
涸川に鷺は白さを貼り付ける
水重く描き空より枯れ広む
赤松は山懐の雪に酔ふ
切株の雪を大事にする丹さ

雪 蛭

丸井 巴水

満載の春の燈はこぶ野の列車
日脚伸ぶ湖面をめくる石飛ばし
雪蛭の四隅そつと浮く
臘月憑かれしままの歩幅にて
風花や湖みて温き缶珈琲



京鹿子集

豊田都峰選

千葉 直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

水仙の系図いちばん上は海
大噓して籠の字が大空へ

厨まだ低音なりし牡蠣の殻
勿来かな星の明るい零下五度

捨て猫のやうな島見ゆ冬館

雪ほろろ闇の表に息を足す

強がりの白を崩さず冬椿

微笑羅漢回らす雪に野は消えり
山風の父と打ちあふ大氷柱

佗助の伏目がちなる明日かな

子と見たき砂漠十景夕映えも

臘梅にいろを移して昼の月

京都 正田 巴麻

江戸 伊吹 之博

家系譜に立春の枝芳しき

初受験時差指おりて娘を思ふ

送り出す加齢ひいなに紅足して

聖バレン祈り通じて花嫁に

冬木の芽新期講座のピラ攻めに

実南天周りに馴染み色褪せぬ

寒明くやゆるむ釦を綴じ直す

ライラックお礼の花束長持ちす